

おかげさま



聞^{もん}
というなり

なきを

疑^{うたが}
うころ

本願^{ほんがん}
をききて

親鸞聖人の『一念多念聞意』から、念仏往生の誓願である第十八願が成就した第十八願成就文を解釈された一文です。「如来の本願を聞いて、疑う心がないのを『聞』というのである」と阿弥陀さまの根本の誓願の救いを疑いなく、二心なく聞く、「聞」の大切さを示されました。

聖人は、本願を聞くということ
を「聞名」として解釈されて、〈「聞」といふは如来のちかひの御なを信ずと申すなり。〉と、「聞」を解釈されるのに名号を信ずるという「信」をもって示されます。これは、第十八願成就文の「聞其名号」のご解釈と同じです。「名号」を「聞く」ということが「信心」であるというこのことは、浄土真宗の信心の特質です。

古来「聞名」に三種の意義があるといわれています。一つには、名号を聞信するという凡夫に相應の「信」であるということ。二つには、「聞名」は「称名」に対する言葉で、聞名による真実信心は、私たちの称名の「行」に先立ち新前行後と言われます。逆に、第十七願によって讃嘆された「称名」を聞くという次第からすると、行が信に先立つこととなります。称名が称えものものでありながら聞きものといわれる由縁です。三つには、「聞名」が凡夫自力の信心ではなく、名号のはたらきによって信心が発起するという如実の信心をあらわしています。

このように、本願に誓われた名号を念仏して助けてもらうのではなく、助かってくれと拝まれている阿弥陀さまの御名を「聞名」し信心を獲るのが、本願の救いの要であります。

皆さまはお気づきでしょうか。樹覚寺の本堂の中、外陣香炉（皆さまがお参りする時、お香を薫ずる（お線香をあげたり、香炭に抹香をくべる）大きな金香炉）の向かって右側、賽銭箱（浄財箱）の隣に、冊子・案内・リーフレットなどとともに、本願寺新報（2018年1月1日号）が置いてあるのを。その第一面に「仏さま」についてのことが載っていることを。

「ほとけさま」。耳にすることは多いと思いますが、どのように受け取られておられますでしょうか……。

「仏」とは、「仏陀」すなわちインドの言葉の「Buddhaブッダ」を中国語に音写（音を漢字に当てる）したものです。他にも様々な漢字が当てられています。言葉の表わすものを漢字の意味に合わせると、「覚者」「覚りをひらかれた方」と言われています。ただし、言葉の意味だけ知っても、単に知識が増えただけですね。私との関わりが明らかになってはじめて「ほとけさま」になるのではよ。

あなたの「ほとけさま」は？ 私の「ほとけさま」、もちろん「あみださま」ですよ。いや「なんまんだぶつ」かな。南無阿弥陀仏の願いが声となって、私の口から出ていただける仏さまですよ。

仏教讃歌に、「みほとけは（仲野良一作詞）」という歌があります。

あけしの郷 明石山樹覚寺 参加をお待ちしています

三月 一日 晨朝会

三月十七、二十一日 みんなの作品展

三月 十八日 法話会

三月 十八日 仏花 線香販売

三月 二十一日 仏花 線香販売

三月 二十一日 彼岸会法曹

三月 二十七日 東京教区仏教婦人会連盟

結成六十周年記念大会

四月 一日 晨朝会

四月 八日 樹覚寺仏教婦人会総会

四月 十八日 栃木南組門徒推進員総会

四月 十八日 法話会 於群馬祖西福寺

五月 一日 晨朝会

五月 八日 樹覚寺仏教婦人会例会

五月 十二日 親鸞聖人降誕会法曹

六月 一日 晨朝会

真実の歩みは安心の歩み 急仏とともに

あけし酔話

お釈迦様の生涯

入滅^{にゅうめつ}

八十歳になったお釈迦さまは、ヴェールヴァ村で雨期を過ごそうと思い、アーナンダなど数名を残し、ほかの修行僧を托鉢に便利なヴェーサリーに帰らせ、雨安居に入りました。

この雨安居の最中に、お釈迦さまは、とても重い病気になり、死ぬほどの激痛に襲われましたが、薬も十分に手に入らない小さな村での出来事に、アーナンダは「お釈迦さまにもしものことがあれば…」と考えると、ただオロオロとうろたえるばかりでした。

やがていくらか体調を持ち直したお釈迦さまは、「この上、私に何を期待しようというのか。伝えるべきことはすべて伝えた。これからは自分の人生を自分の足で歩め。ほうに依って、法を依りどころとして、他のことにふりまわされるのではなく、せっかくの人生を精いっぱい生きなさい。法をよろこぶ人がいるところ、私は常に共にある」と静かに、しかし、力強くさとされるのでありました。

雨期が終わる頃、少し体力を回復したお釈迦さまが托鉢をしながら「私がこの風景を見るのは、これが最後であろう」と話されるのを耳にしたアーナンダは、最後の時が近いことを知らされるのでした。

入滅の時の近いことをわかったお釈迦さまは「すべては移り変わる。片時として止まることを知らないのであるから、怠ることなく努力して、修行を完成させなさい」と、お弟子方を励ますのでした。

みほとけは—— まなこをとじてみなよべば さやかにいますわがまえに
 みほとけは—— ひとりなげきてみなよべば えみてぞいますわがむねに
 みほとけは—— したいまつりてみなよべば つつみていますわがいのち

み仏は 眼を閉じて み名呼べば 清かにいます 我が前に
 み仏は 独り嘆きて み名呼べば 笑みてぞいます 我が胸に
 み仏は 慕い奉りて み名呼べば 包みてます 我がいのち

漢字交じりにすると、イメージが変わりますね。我が「いのち」を包み込んで共に歩んでおられる我が仏さま。あなたの仏さまは、いかがでしょうか。

他力のほとけさまなれば、皆同じほとけさま。

ナモアマダブツ



あけし あれこれ

あせび (馬酔木)



会館の落慶の折に、庫裡の前の庭も手直ししてから30年たち、植木も大きくなりました。その一本のあせびも、植木屋さんが畑で育てていた低木を植え足してくださいました。倍くらいの大きさになり、花が沢山咲くようになりました。ふさふさと可愛い花が咲きます。

アセビ

ツツジ科アセビ属の常緑低木。日本に自生し、観賞用に植栽もされる。別名あしび、あせぼ。

馬酔木の名は、「馬」が葉を食べれば毒に当り、「酔」うが如くにふらつくようになる「木」という所から付いた名前であるとされる。

アセビは万葉歌人の多くが住んでいた奈良地方には、特に多く見られる植物。なかでも奈良市の奈良公園には、樹齢百年ほどのアセビの巨木（樹高3メートルくらい）が群生しているところがある。多くの草食哺乳類は食べるのを避け、食べ残される。そのため、草食動物の多い地域では、k pの木が目立って多くなることがある。例えば奈良公園では、シカが他の木を食べ、この木を食べないため、アセビが相対的に多くなっている。逆に、アセビが不自然なほど多い地域は、草食獣による食害が多いことを疑うこともできる。

そのようなことから万葉集には、アセビを詠んだ歌がたくさんある。

